

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00820

研究課題名(和文) The use of virtual exchange and cross-cultural collaborative learning in higher education

研究課題名(英文) The use of virtual exchange and cross-cultural collaborative learning in higher education

研究代表者

ヒーリ サンドラ (Healy, Sandra)

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：10460669

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の結果は、異なる国の学生同士のバーチャル交流が教室の構造に大きな影響を与え、教室と現実世界との境界線を曖昧にしていることを明らかにした。バーチャル交流においては、参加者間の関係が変化し、教師の役割はよりファシリテーター的な位置づけとなり、学生は学習プロセスにおいてより中心的かつ能動的な存在となること、また、より多くの学生が異文化体験をすることができ、参加者の異文化感受性に影響を与えるが、それは学期全体にわたる長期プログラムにおいてのみであり、短期プログラムはほとんど影響を与えないことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化とバーチャル環境の両方が増加した現代社会において、教育においてますます重要な役割を果たす中、異文化間能力の情緒的側面である異文化感受性を扱う研究は社会的にも科学的にも大きな価値があるといえる。私たちは、今回の研究を通して、先行研究において開発された異文化感受性尺度は必ずしも全ての文化的文脈に応用できず、より日本の文脈に沿った測定方法を開発する必要があることを発見した。今後は、日本における測定方法の開発に加え、アフリカ地域、特にブルンジとケニアにおける更なる研究を行う予定である。この分野の研究はアフリカではほとんど行われていないため、グローバルな観点からも意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：The use of virtual exchange and various kinds of online education developed significantly over the period of the study due to the Covid-19 pandemic and became more common and central to learning around the world. The findings of this research show that virtual exchange significantly impacts the structure of the classroom, blurring the lines between the classroom and the real world. The relationships between the participants also changed: the role of the teacher becomes more of a facilitator and the students become more central and active in the learning process. Virtual exchanges allow a larger number of students to have intercultural experiences and impact the intercultural sensitivity of the participants but only in long-term programmes over a whole semester. Short-term programmes have little impact. Pilot studies on physical study abroad programmes which we also undertook but were limited by the impact of Covid-19 had a more significant impact on cultural sensitivity.

研究分野：外国語教育

キーワード：Cultural Sensitivity Virtual Exchange Intercultural Exchange

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

このプロジェクトは、コロナ禍や日本の高等教育にデジタル・ラーニングが大規模に導入される以前に構想された。しかし、この10年間で、ビジネスや社会におけるバーチャル交流の利用は飛躍的に増加している。バーチャル交流に関する研究は数多く存在するが、異文化間コミュニケーションにおける情報通信技術 (ICT) の利用、すなわちデジタル異文化間コミュニケーションは、コミュニケーション研究者にとって比較的新しい研究分野とみなされている (O'Dowd, 2016, 2018)。これまで異文化間コミュニケーションの研究に用いてきたモデルが、デジタル異文化間コミュニケーションに適しているかどうかはまだわかっていなかった。さらに、ほとんどのモデルは西洋文化の概念に基づいており、他の文化に使用するには適していない可能性がある。そして、異文化間コミュニケーション研究は通常、オンラインでの相互作用ではなく、対面での相互作用に基づいている。従って、日本ではこの分野の研究が不足しているという背景があった。

### 2. 研究の目的

申請時の研究の目標は、第一に、参加者であるすべての教師と生徒のために、国際的なバーチャル交流の設定に関する実際的な問題を検討すること、第二に、デジタル異文化間コミュニケーションと異文化間能力に関する知識を深めることであった。もう一つの目的は、デジタルリテラシー、言語能力、異文化認識、国際社会で機能する能力を育成することで、グローバル化しデジタル化された世界で働く日本の生徒の将来に備えることであった。

我々は、文化的な違いを理解し、理解し、受け入れる能力である「異文化感受性」という情緒的な側面に焦点を当て、異文化間コンピテンシーを探求することを目的とした。異文化間コミュニケーションの感情的側面を測定するために、我々は Chen and Starosta (2000) によって開発された Intercultural Sensitivity Scale (ISS) と呼ばれる質問紙を使用した。この尺度は世界中で様々な研究が行われているが、日本ではほとんど研究が行われておらず、我々は日本の文脈における尺度の妥当性と信頼性を測定したいと考え、以下のリサーチ・クエスチョンを立てた。

1. 学生間のバーチャル交流の中ではどのような問題が生じ、参加者はどのように解決しているのか。
2. 異文化間能力、特に異文化感受性に関連して、どのようなパターンが現れるか。
3. ICT は文化にどのような影響を与え、文化は ICT の利用にどのような影響を与えるのか。

### 3. 研究の方法

調査は混合法のアプローチに従った。異文化感受性を測定するために、Chen and Starosta (2000) が開発した Intercultural Sensitivity questionnaire を使用した。この質問票は日本語に翻訳され、Google フォームで学生に配布された。

質的データは、何度か繰り返されたバーチャル交流の中で学生から収集され、学生の振り返りを求めるアンケート、書面による振り返り、ビデオによる振り返りが含まれた。ビデオリフレクションの音声は Otter.ai というテープ起こしソフトにアップロードされ、手作業でチェックされた。すべてのデータは何度もチェックされ、NVivo にアップロードされ、さらに手作業で分析された。教師の振り返り日誌のデータも同様に分析した。

### 4. 研究成果

ISS の質問票を分析した結果、質問票は日本の文脈に合わないことがわかった。オリジナルの研究では5因子構造であったが、日本の学生を対象とした調査では3因子モデルが最も適合することがわかった。3因子モデルは、相互作用否定度-7項目、相互作用自信-5項目、相互作用意識-9項目であった。3因子モデルは実行可能なモデルを提供しているものの、日本の文脈に完全に適合しているとはいえないため、我々は現在、Q方法論(備考参照)を応用して日本の文脈に適合した新しいモデルを製作中である。Q方法論は、もともと1930年代にウィリアム・ステファンソンによって考案されたものである (McKeown & Thomas, 1988)。Q方法論では、参加者は自分たちの観点から何が有意義で重要であるかを決定するよう求められており、この方法によって日本文化により適した項目が提供されることが期待される。

また我々は、学生と教師から得た大量の質的データと交流の経験を分析した。その結果、国際的なバーチャル交流は、教室を協力的な空間に再構築する機会をもたらす、伝統的な上下関係のある教師と学生の役割を曖昧にし、両者に新たなエネルギーをもたらすことがわかった。以下に教師及び学生から得られたデータ分析の結果、および実践の成果を示す。

#### (1) 教師のデータ分析

教師を対象としたアンケートのデータを分析した結果、遠隔コラボレーション・プロジェクトの導入は、学習環境に変化をもたらす、教師と学生間のコラボレーション、信頼関係、パワー・シェアリングのレベルを向上させ、生徒の自主的な学習や学習意欲の向上につながった。実際に、共

同研究者の Oliva Kennedy の授業におけるリーダーシップ・アイデンティティに影響を与え、彼女のクラスでより協力的で参加型の学習環境を確立するのに役立った。(Healy, S. & Kennedy, O. (2023). Reflective practice and rethinking teacher leadership identity in telecollaborative. In S. Egitim & Y. Umemiya (Eds.), *Leaderful Classroom Pedagogy Through a Multidisciplinary Lens: Merging Theory with Practice*. Springer Nature Singapore にて成果を発表した。)

フィリピンとのバーチャル交流は、オンライン英会話スクールとのコラボレーションであり、我々が関わった交流の中で最も長く続いているものだった。これは従来のモデルのどれにも従わず、日本の大学という特殊な状況に合わせて開発されたものである。我々はこの新しいモデルを Teaching Online Together の頭文字をとって TOT と名付けた。TOT は、伝統的な個別指導スタイルの学習とサービス・プロバイダー・アプローチの要素を組み合わせたものである。我々の大学の講師は、他の教育機関の講師と協力し、オンラインで一緒に授業を実施した。このアプローチの利点は、利便性、柔軟性、手頃な価格である。学生は複数の講師による集中的な個別指導を体験し、グローバルな視野を養うことができた。(Healy, S., & Kennedy, O. (2020). The practical realities of virtual exchange. In E. Hagley and Y. Wang (Eds) *Virtual exchange in the Asia-Pacific: research and practice*. Research-publishing.net にて成果を発表した。)

## (2) 学生のデータ分析

英語は、ネイティブ・スピーカー中心から、より広範なコミュニティで使用されるようになっていく。そのため ELF (English as a Lingua Franca) の概念は「ネイティブ・スピーカー規範への言及によって形式的に定義されるのではなく、異文化間コミュニケーションにおける使用によって機能的に定義される」(Hülmbauer, Böhringer, & Seidlhofer, 2008, p.27)。現在、さまざまなコミュニティが言語を所有するという意識が生まれ、英語が「多重言語」化しているといえる (Sergeant, 2012)。今後はこのような観点から分析を行うことも考えうる。

日本の学生は、言語学習に対するモチベーションが低く、自分の言語能力に全体的に自信がないと報告されており、このような自尊心の低さは、NES (Native English Speaker) 規範への過度の依存と関連している可能性がある (Yujobo, 2019)。したがって、失敗した言語学習者としての現在の自己イメージに代わって、グローバルな舞台で行動する言語使用者としての自分自身のイメージへと生徒を導くことが重要である。バーチャル交流を使用することは、生徒の自尊心を高め、グローバル化した世界において有効で価値あるツールとしての ELF の役割の変化を理解するのに役立つ。学習者が VE に没頭すると、ELF を使うことで、その言語を母国語とする人とコミュニケーションするよりも不安を感じなくなることに多くの学習者が気づく。Guarda (2013) も同様の結果を得ている。

コミュニケーションスタイルの違いは、時として誤解を生む。その一例として、日本語話者は、他の言語話者には馴染みのない短い沈黙の時間を話し言葉の中にしばしば含む。日本人は沈黙のような「暗黙的で非直接的なコミュニケーション形態」を用いるという研究もある (McDaniel, Samovar, & Porter, 2003, p.255)。このような不協和の結果、参加者は沈黙を埋めるために高関与とストラテジーを用いて応答することがあり、逆に日本人の対話者はこれを不快に感じていた。このような問題を特定し、安心感を与え、指導することで、またマルチモーダル・コミュニケーションを使用することで、このようなコミュニケーションの困難はいくらか改善することができる。

日本人学生の多くは、参加する予定の交流が始まる前に、自分の英語レベルが提案された活動には不十分だと考え、緊張と不安を感じたと報告した。しかし、その心配はすぐに杞憂であることがわかり、多くの生徒が相手から理解されたことに安堵と喜びを示した。

大学の学生の多くにとって、他国の人と自律的に、あるいは半自律的にじっくり交流したのは初めてのことであった。そのため、この経験は彼らにとって重要であったと多くの学生が報告した。学生のコメントの例をいくつか挙げる：「貴重な体験でした」、「外国の方と話すのは初めてでした。楽しかった」、「嫌いだった英語を話すのが楽しくなった」、「なぜ 1 学期にもやらなかったのでしょうか？」

## (3) 困難だった点

異なる地域の教員を結びつけ、英語で一緒にコースを作ることは論理的に困難であることが判明したため、英語教員による専門英語教育 (ESP, English for Special Purposes) のアプローチで交流が行われた。ベルギーのモンス大学での交流のテーマは「建築」で、生徒たちはペアを組み、様々な課題に取り組み、最終的には一緒に建物や空間を設計し、両校の建築の教師によって評価された。

交流の継続は外的な状況により困難であったが、その主なものは、このプロジェクトの全期間中に起こった新型コロナウイルスの大流行であった。バーチャル交流の相手先出会った QQ イングリッシュはコロナ禍中に閉鎖された。そのため、我々はミンダナオ大学に提携先を変更し、SDGs を主なトピックとした学生同士のバーチャル交流に変更した。

## (4) 将来の展望

今後我々は、ヨーロッパとアフリカの大学と協力し、公教育におけるバーチャル交流の利用に対する参加者のアプローチと態度を調査し、より効果的な文化・言語交流の方法を開発することを目的とする。また、参加者の異文化感受性を測定し、コミュニケーションプロセスの一部としてのテクノロジーに対する参加者の態度や、3大陸における文化とテクノロジーの相互関係を探る予定である。その際にはQ方法論を用いることが考えられる。

#### 参考文献

- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (2000): The development and validation of the intercultural communication sensitivity scale. *Human Communication*, 3, 1-15.
- Hülmbauer, C., Böhringer, H. & Seidlhofer, B. (2008) Introducing English as a lingua franca (ELF): Precursor and partner in intercultural communication. *Synergies Europe*, 3, 25-36
- McKeown, B., & Thomas, D. (1988). *Q Methodology*. Sage.
- O'Dowd, R. (2018). *From Telecollaboration to Virtual Exchange: State-of-the-art and the Role of UNICollaboration in Moving Forward*. Research-publishing. net, 1, 1-23.

備考：Q方法論は、1930年代にウィリアム・ステファンソンによって考案・開発された（McKeown & Thomas 1988）。この方法論は、主観性のとらえどころのなさに科学的な枠組みを持ち込むことを目標に開発された。これに取り組むにあたり、検査や比較のために一定の視点を保持する目的で、個人が自分の有利な立場を表現できるようにする方法論を開発した。このアプローチの鍵は、人々の間のパターンを探るのではなく、個人の反応パターン全体、つまり自己言及の観点からデータを考察することである。事実上、テストではなく人が変数なのである。Q方法論による研究では、個人間あるいは個人の側面全体の相関関係を探る。その際、この方法論は参加者をテストするわけでも、先験的な意味を押し付けるわけでもない。参加者は、自分たちの観点から何が意味深く重要であるかを決定するよう求められる。これは、Qソートというプロセスによって行われる。このプロセスから、本質的に相対的な評価のセットが生み出される。そして、複数の人々のデータを要因分析する。これにより、同じ順序で特性をランク付けした個人のグループが明らかになる。Watts and Stenner (2005)によれば、与えられた項目は、全体的な構成の文脈においてのみ重要性を持つ。意図された研究対象であるため、Q方法論による研究で因子分析されるのは、これらの全体的な構成（テスト結果や測定値ではない）である。これは、提示された項目の異なる部分集合によってではなく、異なるが特徴的な方法で構成された提示された項目すべてによって例示され、表現される一連の因子（参加者が生成する構成に基づいて負荷される）を生成する。これらの構成の意味/意義は、先験的な仮定ではなく、解釈によって事後的に帰結されなければならない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Kennedy Olivia and Healy Sandra	4. 巻 -
2. 論文標題 Exploring Student Failure to Use Smartphones for Language Learning	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 OnCUE Journal Special Issue Volume 3	6. 最初と最後の頁 34-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Healy Sandra	4. 巻 -
2. 論文標題 COVID-19 Pandemic-Influenced Changes to Japanese University Student Digital Identity	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JALT 2020・Communities of Teachers and Learners	6. 最初と最後の頁 356～356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTPCP2020-44	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Healy Sandra	4. 巻 -
2. 論文標題 Transitions, bridges and connections: student reflections on the role of SNS in ERTL in 2020.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Remote Teaching and Beyond	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTSIG.CALL.PCP2021-03	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kennedy Olivia	4. 巻 -
2. 論文標題 The negative impacts of student use of online tools during emergency remote teaching and learning on teacher-student relationships.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Remote Teaching and Beyond	6. 最初と最後の頁 40-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTSIG.CALL.PCP2021-04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sandra Healy, Olivia Kennedy, Yasushi Tsubota	4. 巻 2
2. 論文標題 Virtual exchange and ESP: Natural bedfellows	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 OnCue Journal Special Issue	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sandra Healy, Olivia Kennedy, Yasushi Tsubota	4. 巻 1
2. 論文標題 Virtual Exchange and English for Specific Purposes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CUE ESP Symposium 2019	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasushi TSUBOTA, Tsutomu INAGAKI, Takayuki NOZAWA, Yasushige ISHIKAWA	4. 巻 -
2. 論文標題 A Study of New English Presentation Lessons Using Online Reflection Forms with the Pandemic: Adaptation of Speech Instruction, Experience Sharing and Systematic Reflection	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of the 24th International Conference and Workshop on TEFL & Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 197-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kennedy Olivia, Healy Sandra, Fukada Chie, Kuwahara Noriaki	4. 巻 222-227
2. 論文標題 Teachers' physiological signals to improve teacher-student relationships	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Intelligent CALL, granular systems and learner data: short papers from EUROCALL 2022	6. 最初と最後の頁 222 ~ 227
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14705/rpnet.2022.61.1462	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TAURA Amanda、HEARLY Sandra	4. 巻 34
2. 論文標題 Japanese High School Returnees' Identity : Translanguaging of the Mind, Body and Soul	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 183 ~ 193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00018024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計19件(うち招待講演 0件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Healy Sandra
2. 発表標題 A Different Kind of Mind
3. 学会等名 Living on the Edge (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Healy Sandra
2. 発表標題 Transitions and connections: student reflections on emergency remote teaching and learning (ERTL) in 2020
3. 学会等名 JALT CALL 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田康・富田英司
2. 発表標題 オンライングループワークにおける録音ログの活用法の検討
3. 学会等名 次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Healy Sandra
2. 発表標題 Trends and Challenges of Educational Inclusion: Language Learning Support for Ethnic Minority School Children in Japan
3. 学会等名 Asia Pacific Conference 2021: Diversity and Inclusion (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Healy Sandra
2. 発表標題 Gradations of Participation, Inclusion and Success in Emergency Remote Online Teaching and Learning (ERTL)
3. 学会等名 EuroCALL 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 A Social Realist Perspective of telecollaboration
2. 発表標題 Sandra Healy, Yasushi Tsubota, and Olivia Kennedy
3. 学会等名 EuroCALL Gathering 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sandra Healy
2. 発表標題 Measuring Intercultural Sensitivity in an African Context
3. 学会等名 MANAGEMENT UNIVERSITY OF AFRICA 8th International Leadership Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 Sandra Healy, Olivia Kennedy
2. 発表標題 Digital identity of Japanese university students
3. 学会等名 JALTCALL 2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Olivia Kennedy, Sandra Healy
2. 発表標題 Technology is no Band-aid: A Duolingo Failure in the High School Classroom
3. 学会等名 JALT Study Abroad SIG Online Conference 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sandra Healy, Olivia Kennedy
2. 発表標題 Teachers, Tasks and Telecollaboration
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 第58回国際大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasushi Tsubota, Yoshitaka Sugimoto, Sandra Healy, Kayoko Ito
2. 発表標題 Practical Shadowing Activities in class with the reflection of CMC with Filipino teachers
3. 学会等名 the 27th EUROCALL 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sandra Healy
2. 発表標題 Measuring Intercultural Sensitivity in Japan
3. 学会等名 NDSU International Communication and Community Development Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sandra Healy
2. 発表標題 Measuring Intercultural Sensitivity in Virtual Exchange
3. 学会等名 Multicultural Japan - Research and Methodologies for Teaching Language and Culture
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sandra Healy, Olivia Kennedy, Yasushi Tsubota
2. 発表標題 Virtual Exchange and English for Specific Purposes
3. 学会等名 CUE ESP Symposium 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Olivia Kennedy, Sandra Healy, Tracey Noble
2. 発表標題 The Impact of Social Robots on Teacher Affect in the Language Classroom
3. 学会等名 ALANZ2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1 . 発表者名 Olivia Kennedy, Sandra Healy
2 . 発表標題 Combining Wearable Sensor and Video Data to Improve Classroom Interaction
3 . 学会等名 JALTCALL 2022
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Olivia Kennedy, Sandra Healy
2 . 発表標題 Making Trust Measurable between Teacher and Student
3 . 学会等名 EuroCALL 2022 ( 国際学会 )
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Sandra Healy
2 . 発表標題 Intercultural Sensitivity in a VUCA World
3 . 学会等名 Embracing Change through Resilience & Transformation in the Post-COVID-19 World
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Melodie Cook, Davey Young, Sandra Healy, Alexandra Burke, Megumi Yoshieda, Olivia Kennedy
2 . 発表標題 Barrier-free learning in Japan: Panel
3 . 学会等名 PanSIG 2022
4 . 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Naouel Zoghalmi, Cedric Bruderemann, Cedric Sarre, Muriel Grosbois, Linda Bradley, et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Research-publishing.net	5. 総ページ数 339
3. 書名 CALL and professionalisation: short papers from EUROCALL 2021	

1. 著者名 Dennis Koyama, et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 CSMFL Publishers	5. 総ページ数 358
3. 書名 Development of Innovative Pedagogical Practices for a Modern Learning Experience	

1. 著者名 Healy, Sandra, Tsubota, Yasushi, Kennedy, Olivia	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Research-Publishing.Net	5. 総ページ数 256
3. 書名 Virtual exchange in the Asia-Pacific: research and practice	

1. 著者名 Healy, Sandra, Tsubota, Yasushi, Kennedy, Olivia	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Research-Publishing.Net	5. 総ページ数 369
3. 書名 CALL for widening participation: short papers from EUROCALL 2020	

1. 著者名 Sandra Healy, Olivia Kennedy	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Research-publishing.net	5. 総ページ数 -
3. 書名 Virtual Exchange in Asia Pacific	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坪田 康 (Tsubota Yasushi) (50362421)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授  (14303)	
研究分担者	KENNEDY OLIVIA (Kennedy Olivia) (50816543)	長浜バイオ大学・バイオサイエンス学部・講師  (34204)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ベルギー	モンス大学			
フィリピン	ミンダナオ大学			
ケニア	ジョモ・ケニヤッタ工科大学	アフリカ・マネージメント大学		
ブルンジ	Summit International Institute			
ケニア	Management University of Africa			